Osaka University Knowledge Archive

Title	成尋阿闍梨の夢と「夢記」 : 参天台五台山記の世界
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	語文. 1995, 62-63, p. 3-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68866
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

成尋阿闍梨の夢と「夢記」

――『参天台五台山記』の世界――

伊井春樹

一　紫衣の下賜

延久四年（一〇七二）八月二十四日、天台山国清寺から一旦杭州に帰りついた成尋一行は、休む間もなく神宗皇帝の都である開封に向かって出立し、十月十三日に入京して太平興国寺伝法院に落ち着くことになった。成尋は渡宋の目的でもある五台山への巡礼をかねて申請し、「昨日吉県、州通判郎中に謁シ、前ニ表ヲ奏セシ、五台ニ遊ブコト、今朝中文牒有リテ州ニ下ル。五台ニ遊ブヲ許シ、マタ官員妨送シテ上京シ、面ニ皇帝ニ見エシム」（『参天台五台山記』[1]七月六日条。以下、私に読み下した）と、皇帝の許可を得ていたことによる。翌七日には「吉県仙尉秘書出デテ台州ノ牒ヲ見セシム。上京シテ面ニ皇帝ニ見ユベシノ宣旨。其ノ状ニ云ハク云々」と、帝都での拝謁の宣旨まで下されるという栄誉も記録する。

十月二十二日、成尋と供僧七人、それに通事を含めた九人は初めて参内し、聖主と延和殿において朝見の儀となるが、第一の門に入って下馬して以降、案内されて第四の門をくぐるまでのさまざまな儀式や人々の動きが淡々と記述されていく。皇帝は北面して銀の椅子に座し、その後や左右には数百人が立ち並び、中に胡録を背負った武人数十人が控え、謁見するためであろうか、庭中には百人が左右に列し、成尋の一行もその中にあった。やがて成尋達の順番となったようで、八人が南に向かって進み出、「引声シテ引見ト云フ」とあるので声をのばして告げたのであろう、通事が前に出て「敬シ屈シ」て「聖躬万宝」と叫ぶと、諸僧は頭を低くして「万々歳」を斉唱する。これは第三の大門を入ったところで、官人から御前での万歳と叫ぶ作法を習っていたことによる。

この後、「引声」による「例物ヲ賜フ」との声によって衣絹が運ばれ、御前からの勅使によって「諸寺ニ参リ、焼香スベキ」宣旨がもたらされ、また別の使いが「五台山ニ参ルベク仰セ了ンヌ」と伝えたのである。これで拝謁の儀が終り、休憩する安下所で食事が供されるのだが、「種々ノ珍菓、菜飯記し尽スベカラズ」とその歓待ぶりに成尋は感激する。皇帝からの賜物を車に載せて伝法院に帰り着いて後、院の諸僧たちが訪れて「朝見ヲ随喜ス。三蔵云フ。西天ヨリ、三蔵二人去年来タリ。朝見セズシテ五台ニ参リ了ンヌ。汝王者ニ於テ縁有ルナリ」と、成尋の待遇の破格な様相を伝えて喜びを分かちあう。昨年、三蔵（高僧）が西天（インド）から訪れたもの、朝見することなく、五台山への巡礼だけが認められたようで、

同じ外国からの僧に対するもてなしの違いと、下賜の品々のあったことを称賛するのであった。

成尋にとってこの日は忘れられない思い出だったようで、とりわけ紫衣の拝領は意義の深い皇帝との運命的な結びつきだった。そのことについて、

御前ニ於テ紫袈裟衫衣裙ヲ賜ハル。成尋ノ為ニ過分ノ事也。延久三年十二月十三日、日本備中国新山ニ於イテ此甲袈裟ヲ賜フト夢見ヌ。覚メテ後即チ思フニ、大唐国ニ於テ紫衣ヲ賜フノ相也。今、去年夢ノ如シ。七人皆褐色ノ袈裟衣裳、八人同ジク八丈ノ美シキ広絹二十疋也。通事銭三貫也。諸人同心シテ各二疋ノ絹ヲ通事ニ与ヘ了ンヌ。合セテ十六疋也。中間ノ僧二人、下法師二人、朝見セラルルコト是希有也。各廿疋并ニ装束ヲ充テ賜ハル。已ニ以テ富人ト成リ了ンヌ。

などと、成尋に従って渡宋した中間の僧や下法師にいたるまで皇帝の拝謁を受けたこと、またそれぞれに袈裟や絹布が与えられたことの喜びを記すとともに、紫衣の袈裟については不思議な夢との符合を思わずにはいられなかった。それは延久三年十二月十三日備中国の新山において、参内してこの同じ甲袈裟を拝領した夢を見たことで、今思うとそれは現実に宋皇帝から下賜される瑞相であったとし、まるで昨年の夢がまだ続いているようだともいう。

『小右記』の永延元年（九八七）二月十一日後に、奝然が前年に将来した刷本一切経論や白檀の五尺釈迦像等を蓮台寺に運ぶ様子を高遠・公任と見たことを記すが、そこには、「雅楽大唐楽、其次奝然着甲袈裟、七八人僧等相共歩行相従、其道自朱雀大路登北、自二条大路東俺、自東大宮登北、自一条西折、到蓮台寺云々」とある。朱雀大路から安置する寺までの奝然の姿は「甲袈裟」であったようで、これは唐楽の演奏とともに宋での皇帝から下賜された場面の再現を演出したのであろう。どのような形をしていた袈裟なのか不明だが、実資がそれと知ったというのは、離れていてもすぐに判明するスタイルだったはずで、あるいは中国で特別な待遇を受けた僧だけが拝領して身にまとうことが許されていたのであろうか。この折の美々しい行装は後まで語り伝えられたであろうし、奝然の足跡を慕う成尋は遺品の「甲袈裟」を目にして尊崇と羨望の念を抱いていたとも考えられる。それを成尋自身がいま手にし、しかも昨年の夢と重なるだけに、彼にとってはまさに「成尋ノ為ニ過分ノ事也」と記さずにはおられなかったのである。

成尋が都を離れたのは永久三年二月二日の未明、二日前の一月三十日にそれまでともに生活をしていた岩倉大雲寺から母を仁和寺へ送り届け、十六日との予定を急に繰り上げてのこの日の出立であった。その後の成尋の消息を『成尋阿闍梨母集』[2]からたどると、二月下旬であろうか、「備前よりとて、文持て来たる」と瀬戸内にあり、五月も過ぎ、やがて一巻目は六月頃で終り、第二巻はそれを受けて再び書き継がれていく。六月に成尋母は瘧病を患い、七月になってぶりかえし、八月も過ぎた頃、「筑紫よりよべまで来たる人の、『八月二十よ日のほどに、阿闍梨は唐に渡りたまひなんとて、船に乗るべきやうにておはすと聞きし』と申す」との噂を耳にする。この後に八月十五夜の月のことが記されるので、成尋は宋の商船と渡りを付けて乗り込む手はずが整えられ、出航も近いとの報が大雲寺にもたらされたのであろう。しかし、どのような事情があったのか不明だが、この折の渡航計画は失敗したようで、十月十三日の夕刻に成

尋は突如都へ戻ってくる。九カ月ぶりの再会に、母はもう夢のような心地で、目は涙で霧がかかったようになってしまったという。

成尋は、兄弟の律師に、

岩倉にまかりて、忘れたる文など取りて、明日申の時ばかりにまで来て、やがて淀にまかりて、備中の国にはべなる新山とますなる所にしばしはべりて、近くて、そのほどにおぼつかなきことはべらず。これよりものたまへ、かれよりも申さん。

と言い置き、母のもとに泊らないで岩倉へ赴いてしまった。彼の切迫した状況は不明ながら、「忘れたる文」を取りに帰京したというからには、よほど重要で渡宋には必要な内容だったはずで、明日の午後の申の時分に再び母のもとに立ち寄り、そのまま離京して備中の新山にしばらく滞在する予定だという。

翌日、母の待ち暮らすもとにやっと訪れた成尋は、

このまかりて、しばしはべらんずる所は、昔人の行ひて、極楽にかならず参りたる所なり。百日ばかり行ひて、正月ばかりまかでて、なほ内裏に宣旨申して、賜ばば、本意のやうに唐に渡りて、申して来ん。賜ばずは、とどまりてこそははべらめ。

と告げ、鳥などが飛び去るように落ち着くことなく出ていってしまった。備中の新山は昔の修行者も修行して極楽往生した地であるだけに、そこで百日ばかり勤行し、年の明けた正月に再び上京して天皇に奏上し、渡宋の宣旨が下されるのを願い出、勅許がおりなければあきらめて留るつもりだという。このたびの予定外の成尋の帰京も、その手配と関係していたに違いない。

成尋は、「かならず正月にはまで来なん」と母と約束してあわただしく離れ、十一月になって消息があり、「十月二十日ぞ、備中の新山といふ所にまで来たる。正月のほどに人おこせん」とし、「さりぬべくはみづからも来ん」としたためられていた。十月十四日の夕刻母のもとを立ち、二十日には新山入りし、そこで百日の修行、正月には人を遣わすか、そうでなければ自分自身がきっと都を訪れるというのである。しかし、年が明けても成尋からの連絡はなく、自らの上京もなかったようで、岩倉の僧達も「御迎へに試みに」と正月十四日に新山に下ることになり、母は文を託すのであった。成尋が新山に百日間籠っていたとすると、その明けるのは一月末、そこから安芸に向かったようで、岩倉の僧は「船に乗りたまひしを見て来し」と、迎えどころではなく見送りをしたと、帰京して報告するありさまであった。やがて二月十四日付けの成尋の文が届けられ、

これは、備中より遠き安芸の国といふ所にまで来たり。唐人ありなし聞きて、四月に京にはのぼらん。

と、そこには「かならず正月にはまで来なん」との約束を反故にしたことなど一言も書かれていなく、唐人の行方を求めてさらに西に下ってしまったのだという。「四月に京にはのぼらん」とありはするものの、母は「こたみぞ、まことに便りあらば渡りなんと思ひたまへる、と思ひ果てて、言ふべき方なき心地のみして」と、成尋は今度こそ船便がありさえすればきっと日本を離れるに違いないと確信しているのをみると、四月に上京するなどというのはあまりあてにできない内容だったのかも知れない。

備中国新山で修行をしていた間の十二月十三日に、初めに指摘したように成尋は宮中で紫衣の袈裟を賜わった夢を見たのだが、それが翌年の十月二十二日に現実となったというのである。しかも、「此甲袈裟ヲ賜フト夢見ヌ」と、かつて脅然が晴れがましくも紫衣

を身にまとって行列したように、それは宋皇帝からの下賜の象徴であり、その夢を見たというのは、彼も同じく渡宋して拝謁する可能性をも意味していたことになる。

二　吉夢との符合

成尋は十月十三日に一度帰京し、すぐさま新山に赴いて百日間の参籠をし、翌年の正月には再び母のもとを訪れるとの約束をしながら、彼は二月初めに安芸の国へ「唐人ありなし聞きて、四月に京にはのぼらん」と言い残して西下してしまった。成尋が出奔して後も都との連絡は怠らなかったようで、「大殿（頼通）よりも、こと殿ばらよりも御文あれど」と、渡宋を思いとどまらせようとする人々の意向はたえず伝えられていたようだが、彼は「菩提求むる人は、やんごとなくえさらずあるまじきことを捨ててこそあなれ。かくしまかり歩けど、御祈りどもは、よそにてもみな仕うまつりてこそはあれ」と、修行者としての生き方を開陳し、京都にいなければ祈れないものではないとも表明する。もはや止めようもない悲壮な決意のようで、「唐人」の噂を耳にすると、正月に上京して宣旨を賜るという予定以上に、今の彼にとっては船便の情報のほうが大切であったとも考えられる。しかし、これほどまでに彼をひたすらな行動へと駆り立てたのは、新山での夢告によるのではないかと思う。

『参天台五台山記』にも記していたように、彼は新山に籠っていた十二月十三日に宋皇帝から「甲袈裟」を拝領する夢を見、ほどなく安芸の国を訪れているという唐人の話を聞くと、正月に上京する計画を破棄して直談判しにその地に赴くことにした。これも夢を信じていたからにほかならなく、彼にとって夢は重要な指針であり、生きる心の支えであったといっても過言ではない。内裏へ赴いた夢、それは成尋にとってきわめて実現の可能性の高いお告げであり、これまで幾度となく夢と現実との符合を経験してきただけに、このたびの渡宋は疑いのないことと思ったに違いない。この折とてそうで、安芸での交渉はうまくことが運んだのであろうか、やがて周防に入り、三月十五日には松浦郡壁島で宋の商船に乗り込み、結果として渡宋を果たすことができたのである。そのような決意をうながす夢だっただけに、彼としては新山でのことを記録せずにはおられなかったともいえよう。

三月の末、人に届けられた文に「阿闍梨は筑紫へ唐人尋ねにおはすとて、船に乗りたまひにけり」とあった由で、母は「さればこそと心地も変」る思いで、「さりぬべくは、四月ばかり来ん」とのことばが今さらながら虚しく響いたはずである。しかし、成尋にしてみればたんなる空約束を母に繰り返していたわけではなく、目的は帝から渡宋の宣旨を得ることにあったのであり、そのために十月十三日に急遽帰京して手配をし、今度は正月に、さらに四月にと延期しながらも段取りを付けようと努力をし続けていたのである。彼の計画としては、宋商船との渡航の契約を結び、その後上京して再度奏上して正式な許可を得ようと考えていたようで、新山から安芸、周防、筑紫と移動しながらも都とは緊密な連絡をとり、大雲寺や仁和寺を通じての交渉に期待も寄せていたはずである。しかし、朝廷の態度はかたくなだったのか、それ以上に便船の都合によるのか、彼はともかく三月十五日には孫忠の船に乗り込んだのである。

『参天台五台山記』は「延久四年三月十五日乙未寅ノ時。肥前国松浦郡壁島ニ於テ、唐人ノ船ニ乗ル」と、日本を離れようとする日

から、翌年の六月十二日までの日録で、彼は自らの行動のすべてをつぶさに記録していった。供をした僧七人のうち五人が帰国するのに託したことによって我が国に伝来したのだが、それはまさに成尋は自分の宋における存在のあかしを訴える意図と、宣旨を得ないままの渡宋ながらその必然的な運命にあったことも訴えようとしたのであろう。

成尋達一行にとって、中国までの船旅は緊張する思いだっただろうが、それ以上に乗船している事実を秘匿する必要があり、「海辺ノ人来ル時、諸僧皆隠レテ一室内ニ入リ、戸ヲ閉ジ音ヲ絶ユ。此ノ間辛苦宣ベ尽スベカラズ」と、息を潜めて外の気配をうかがわなければならず、その辛苦たるやとても筆舌に尽くすことができないという。「唐人酒盛、最モ以テ興有リ」と記しながらも、成尋ほかの僧達はひたする「如意輪菩薩念誦法」や「文殊師利菩薩儀軌供養法」等を修し、「法華経」を読誦して無事の出航と航海の安全を祈るしかなかった。翌十六日も「海辺ノ男女頻リニ来リテ売買す。終日戸ヲ閉ズ。極メテ以テ堪エ難シ」、十七日「辰ノ時海辺ノ人来リ集ル。戸ヲ閉ジ声ヲ絶ユ」などと、船出をする唐人の乗組員達へ、近くの漁民たちがしきりに物を売るため訪れていたようで、そこに渡航禁止の日本人が乗り込んでいることが知られでもすれば、たちどころに役人の耳に達する恐れもあるため、人声がするとすぐさま船室に隠れるというありさまである。

十九日に船はやっと順風を得て港を離れたものの、「波濤高ク猛シ。心神迷ヒ惑フ。行法ヲ修セズ。心ノ中ニ念仏ス。波ノ上下ニ随ヒ、船亦転動ス」といったありさまで、「予大袋ニ寄リ懸リ、終日竟夜辛苦ス。五箇年間、不臥ヲ以テ勤ト為ス。今、此ノ時ニ望ミテ、殆ド退転スベシ」と、船の激しい揺れの前には、五カ年もの不臥による仏道の修行もほとんど心が緩みかねないとまで告白する。二十一日には乾（北西）の風が出、このままでは南方に押し流されかねないだけに「船人騒動シ、神ヲ祈リ之ヲトス」と緊迫するが、ほどなく北東の風によって人々は心を落ち着ける。成尋は、「予、心中ニ不動、五台山ノ文殊并ビニ一万菩薩、天台石橋ノ五百羅漢ヲ念ジ、念誦数万遍。戌ノ時、不動尊呪一万遍ヲ念ジ始ム。丑ノ時六千遍了ンヌ。吉夢有リ。寅ノ時一万遍満チ了ヌン。好夢有リ」と、すさまじい数の不動尊や菩薩を念誦し、ひたすら船の安全を祈り続ける。祈りながらもふと睡魔に襲われ、見るとはなしに見たのであろうか、「吉夢有リ」「好夢有リ」と、彼は二度までも希望の持てる夢を見たという。

彼の見た夢の内容は明らかではないが、「吉夢」「好夢」と記しているからには、このような激しい波風に揺られて船の安否もおぼつかないながら、念誦したかいもあったのであろう、確かに大陸に無事着き、念願の五台山への巡礼もかなう、といったようなことではなかったかと思う。三月二十五日にどうにか蘇州石帆山を眺めることができるようになり、後は大陸沿いに北上して杭州に向かっていくことになる。四月十一日は「子ノ時船ヲ出シテ海ニ浮ブ。丑ノ時、夢ニ多聞天太子并ビニ眷属ヲ見ル」と、多聞天（毘沙門天）とその一族の夢を見たという。それについての好悪には言及していないものの、仏を守護する役割だけにこれも「吉夢」であったはずで、これまで祈念してきた効験のほどを成尋は深く感謝したことであろう。このように成尋は見た夢から将来の運勢を判断し、また紫衣の拝領という現実から過去にさかのぼってかつて見た夢の意義づけをする

など、彼にとって夢は我が運命と密接にかかわっていたといっても過言ではない。

もう一例示すと、これは奇妙な夢なのだが、天台山にとどまっていた七月六日、「丑ノ時、縄床ニ坐シテ睡ル間、夢ニ日本ノ左府ニ謁ス。仰セラレテ云ク、琉球国ニ行クノ由コレヲ聞ク。而シテ今大唐ニ在リ。悦ト為スト云々」と、左大臣頼通に拝謁し、「琉球国に赴くと聞いていたものの、今は大唐にいるという。悦ばしいことだ」とおっしゃったというのである。「琉球国」の地名が出るのははじめてのことで、これがどのような文脈のもとにあるのか、ここからだけでは知りようがない。あるいは、壁島を出帆した船が北西の風に翻弄され、このままでは琉球あたりへ押し流されてしまいかねないと、船頭たちが危惧していたことばなどが背景にあったのであろうか。しかし、無事に中国に着き、しかも今は天台山にあるだけに、頼通は成尋の望み通りのなりゆきに安堵したのであろうが、それは渡宋の勅許が下されなかったことに対する逆の思いがこのような夢になったのかも知れない。後冷泉天皇は崩御しているだけに、成尋にとって日本での心残りな存在は、母を除けば二十年来護持僧として仕えてきた頼通であったためなのであろう。

三　「夢記」の記録

成尋一行の行動は、初めにも述べたように天台山の国清寺から十月十三日に都に入り、二十二日には参内して神宗皇帝に拝謁するという栄誉を得ることになるのだが、その後毎日のように諸寺を巡拝し、二十四日には参五台山行きの牒が下され、二十七日には五台山に通事の陣詠も同道する旨の申文を書し、それに「御薬」を添えて呈上している。二十九日の条には、「未ノ時、遊台使臣来ル。沿海盤纒ノ宣旨一紙、州県伝馬ノ宣旨一紙、州県兵士ノ宣旨一紙、皆以テ丁寧ナル宣旨ナリ。朝恩不可思議、感涙禁ジ難シ。以テ後日注シ取ルベシ」と、五台山に到るまでの「沿海盤纒」（「沿海」は「沿路」か、「盤纒」は旅費）の宣旨のほか、各州や県における馬や護衛の兵士についての配慮までが皇帝の命によってなされたのである。具体的な援助のありようは、以下の旅程につぶさに記されており、成尋達の五台山行きは十一月から十二月にかけての厳冬の折だっただけに、この恩恵ははかり知れないものがあったといえよう。

さらに、この同じ日の記事の末尾に、

今、「夢記」ヲ見ルニ、延久元年閏十月七日ノ夜ノ夢ニ、旅路ニ在リテ帝王御薬ヲ召シテ糧ヲ賜フ由云々。中心コレヲ思フニ、五台修行成就ノ相ナリテヘリ。今日、沿路糧料ノ宣旨ヲ見ル。昔ノ夢ニ符契ス。

と、成尋の「夢記」の存在について注目すべき記述を見いだす。彼は皇帝から「盤纒」の給付から馬、兵士にいたるまでの宣旨がもたらされが、これが二日前の「御薬」による直接の代価ではないにしても、なりゆきとしてはそのように見られなくもない。そのことから彼はふと夢での体験を思い出し、すぐさま「夢記」をめくって探してみると、延久元年（一〇六九）閏十月七日の夢がまさに符合することに気がついたのである。成尋は旅にあって、帝王に進上した薬の代りに「糧」を拝領した夢が記されており、今日の宣旨はまさにそれが現実になったといってもよく、これは五台山の修行が望み通りに成就する瑞相にほかならなく、「昔ノ夢ニ符契」しているだけに、遊台使が宣旨を持って訪れた際、彼は「朝恩不可思議」とし、

「感涙禁ジ難シ」と記したのであった。

この記事から、成尋には「夢記」と自ら称する記録が存し、夢を見るとすぐさま年月日とともに内容についてもつぶさに書き込み、身から離さず携帯しており、いつでもふりかえって確かめていたと知ることができる。『成尋阿闍梨母集』によると、治暦四年四月十九日に後冷泉天皇が崩御した後も、成尋は宇治の頼通のもとに留って護持僧としての勤めを果たしていたようで、病気の回復によってやっと解放されたのは七月になってのことであった。岩倉の大雲寺に戻ってそれまでの生活を久しぶりに再開した成尋は、渡宋の決意をしていただけに、母親へ孝行する最後の機会という思いから近くに引き取ることになる。そうとも知らない母親は幸せな日々を成尋そのばで過ごすことになるのだが、「二年ばかりありて」のある日のこと、「このふさしくゐたる行ひ三年果てて、唐に五台山といふ処に、文殊のおはしましける跡のゆかしく、拝まほしくはべるを」と、日本を離れて五台山への巡礼の意向が打ち明けられる。「ふさしく」は、「常座不臥」の修行のようで、これは大雲寺入りした治暦四年から始められており、「二年ばかりありて」とは翌年の延久元年にあたる。[3] その閏十月七日に、彼は夢ながらすでに宋にあって皇帝から薬と引き換えに「沿路糧料」を下賜されたというのである。

彼は瑞夢としてすぐさま「夢記」に記録したようで、それが三年後の延久四年十月二十九日に宋で現実となったというのだから、成尋ならずとも「昔ノ夢ニ符契」した不可思議さを思わずにはおられない。このようなことからすると、初めに引用した延久三年十二月十三日に備中の新山で紫衣を拝領した夢というのも、同じく「夢記」に記されていて、それが現実になっただけにあらためて確かめたのであろう。あたかも、何かすばらしい恩恵を受けると、彼はすぐさま「夢記」にその典拠を求め、いつの夢の結果であるかを確認しているおもむきであり、逆に夢を記録することは将来実現する可能性を信じての営みと考えられなくもない。

成尋一行は五月十三日に天台山国清寺入りし、翌日から各所の寺院仏閣を巡礼してまわるが、とりわけ十八日は成果も多かったようで、書かれた記事の内容も豊富である。辰の刻に轎に乗って山に登り天台大師真身の塔を参拝、大慈寺に赴いて大仏殿・大師堂・戒壇院と礼し、さらに天台山最高位にある華頂峰までたどり、そこから下って歩雲亭に赴く。渓谷の傍らを通って石橋に至ると、そこには広大な道場があり、安置される道猷尊者の金色の等身像を参拝する。傍らの亭子は五百羅漢が供養される大きな建物で、かつて天竺の沙門道猷が砂漠を渉って五台山に詣でた後天台山に至り、ここで礼拝したことによってその像が祭られているのだと成尋は解説する。延久二年正月十一日に後冷泉天皇に出した渡宋許可申請の「申文」(『朝野群載』所収)に、「天竺道猷登華頂峰。而礼五百羅漢」とするように、彼にとっては規範とすべき先達の一人であるだけに、同じ場所に立ち、道猷像を拝するのは感慨もひとしおだったに違いない。

石橋は石梁とも称し、橋の下は渓谷の水が瀑布となって流れて落ち、苔のため滑りやすく通るのはかなり危険だったようである。成尋の記録によると、橋は青白く、長さ七丈ばかり、東頭は広さ二尺、西頭は七尺、竜形亀背の様をしており、紅の梁を渡していたようだとする。二つの渓川が合流して橋の下を怒濤となって流れ、その音

たるや雷鳴の轟くかと思われ、渡るのも困難だったらしく、「近代ノ人、橋ノ中半ニ至リテ、石橋ヲ渡ルト称ス。最モ奇怪ナリ」とするものの、彼は引き返すこともなかったようである。石梁寺で休息した記した後、成尋は「智証大師云」として、

天台山図ヲ披ク毎ニ、恒ニ花頂・石橋ノ形勝ヲ瞻テ、末ニ良縁ニ遇フ。久シク以テ思ヒヲ存シ、遂ニ以テ渡海ス。今小僧、大師ノ前蹤ヲ追ヒ、宿念ヲ遂ゲ石橋ヲ拝ス。感涙極マリ無シ。

と、智証大師（円珍）の門徒だけに、師の足跡を追って華頂山に登り、このようにして石橋を渡ることができた喜びの思いを表明する。智証大師が天台山の絵図を披見しながら、たえず心を華頂山や石橋へ馳せていたのだが、その願いがかなって渡宋し天台山へ赴いたのは仁寿四年（八五四）二月のことであった。二百年以上の隔たりがあるとはいえ、いま偉大なる尊師と同じ土を踏み、景勝の地を眺める体験を我が身に再現するという、成尋は長年の宿念をこのようにして果たすことができたのである。(4)

成尋はこの後に、

今、夢記ヲ見ルニ、日本康平四年七月卅日ノ夜、大河ヲ夢ミキ。白キ石橋有リ。小僧成尋一橋ヲ渡ル。未ダ間断有テ及バズ、一人有テ踏床ヲ以テ渡リ、成尋ヲ渡ラシメ已ニ了ンヌ。夢ノ内ニコレヲ思フニ、天台ノ石橋ナリ。菩提心ヲ発セシニアラザレバコレヲ渡ラズ。今度遂ゲ了ンヌ。心中悦喜ス。今日ヲ以テ石橋ノ体ヲ見ルニ、昔日ノ夢ニ符ス。

と、ここまでもまた「夢記」を取り出し、そこに記された夢と今日一日の行動とが符合すると述べるのである。康平四年（一〇六一）七月三十日の夢によると、成尋は大河に架かる白い石橋を渡ろうとするものの、途中でとぎれて先へ進めなく困っていると、人が現れて平気で通り、しかも自分を導いて向こう岸に渡してくれたというのである。彼は夢の中ながら、これは天台山の石橋だと理解したというのだから、よほどその地に赴きたいと日頃から心にとめていたかを知ることができる。その宿願であった石橋をこの日渡っただけに、これもひとえに菩提心があったためだと、我ながら自負の念も生じたようで、まさにこれは「夢記」と現実とが符合したというのである。

成尋が「夢記」をめくってみて、十一年前に記録していたというからには確かであるにしても、これまでの夢もそうなのだが、あまりにも現実と重なり、できすぎではないかという不審の念もないわけではない。夢の石橋は白、目にしたのは青白、「近代」の人は橋の半ばまで歩いて石橋を渡ったと称するのに対して、成尋は渡り終えたというのは、夢に現れた人（仏）の導きのためで、これは菩提心の有無からくる加護によるのだと彼は主張するのである。成尋にとって、現実の体験がそのまま夢解きという構図になっているといえるであろう。

成尋が五台山行きを決意したのは、頼通の病気回復によって大雲寺に再び帰った治暦四年七月以降であり、そのための準備として三年の趺坐による修行を始めることになったとするのが一般的な理解だが、この石橋の夢はその六年前に見ていたのだという。彼は、宋皇帝に差し出した「奉文」（『参天台五台山記』延久四年六月二日条所収）によると「少年ノ時ヨリ巡礼ノ志有リ」とするように、七歳で出家してほどなくの頃から天台・五台山への巡礼の心が醸成されてきていたようで、年をとるとともにそれが痛切な思いへとなって

きたに違いない。石橋についてかなり現実に近い夢を見たというのは、智証大師の記録を読んでいた予備知識のためで、すでにこの頃から具体的な渡宋の計画を練り、先人達の旅行記も収集していたのであろう。

成尋が母に「年老いり同じくは死なぬさきに、思ふことせまほしきを、唐に五台山といふ所に、文殊の御跡をだに拝みて云々」と述べるように、確かに頼通の病気や後冷泉天皇の崩御も間接的に影響はしていたにしても、直接の動機ではなく、一つの契機だったのであろう。このようなことがなくても、「若くはべりしより思ひしことは、のどかに行ひして、人騒がしからざらん所にあらんと思ひしを」と、成尋の本心は世俗的な高僧としての名声を得るよりも、むしろ仏道の修行にあっただけに、早晩渡宋は避けられないことであったはずである。彼は先師の赴いた石橋を夢に見、かならずやいずれの日か実現するに違いないと、その日のために詳細に記録していたのであろう。

四　夢の奇跡

「夢記」といえば一般に栂尾の明恵（一一七三―一二三二）の作品が知られており、自筆の資料が高山寺等に分蔵されるほか、古筆断簡としても手鑑に押されるのをしばしば見いだす。一つ一つの夢はきわめて詳細な内容で、よく記憶していたものだと感嘆するほどだが、それよりもおよそ百年以前に成尋の「夢記」が存在していたのである。確認できるもっとも早い年代は、石橋の夢を見た康平四年七月の成尋五十一歳、もちろんもっと若い頃から彼は独立した「夢記」をつけていたはずで、晩年にいたるまで書き続けていたのであろう。石橋の一件を見ると、その記録の内容は詳細で、しかもかなり具体的な内容であったことを思わせる。彼は現実に石橋を渡った後「昔日ノ夢ニ符ス」とし、新山での夢では「覚メテ後即チ思フニ、大唐国ニ於テ紫衣ヲ賜フノ相也」と瑞相と判断し、五台山巡礼の宣旨を得ては「昔ノ夢ニ符契ス」と、いずれも夢は現実と結びつくものと理解していた。

成尋達が五台山へ向かったのは延久四年十一月一日、二十八日に中台の真容院に迎えられるのだが、途中西堂の上に五色の雲が出現するという奇瑞をまのあたりにし、その効験は早速翌二十九日の降雪によって示されることになる。開封を出立して五台山に着くまでの二十八日間、彼等はまったく雪のために難渋することもなく過ごしてきただけに、「文殊迎接、敢ヘテ疑フ所無シ」と、これもひとえに文殊の加護によると思わずにはいられなかった。十二月二日に、「五頂ニ雪有リ。此度ハ拝セズ。明年巡礼ヲ遂グベシ」と、今回は真冬の巡礼という時期でもあっただけに、五峰の頂にある寺には参拝することなく、明年に再度訪れる決意をして下山することになった。途中までは大雪、しかも道は凍って馬も歩きづらくしていたが、やがて雪は降り止み、空も晴れてくる。

三日の夜、成尋は「丑ノ時、夢ニ真容院ヨリ還ヘリ出ヅル時、路ノ盤纏・真容院廿石・大石卅石、馬ヲ以テ出立ノ由云々。昨日ノ夢ニ、三万菩薩送リ給フ由云々」と夢を記し、さらに「今日、六十里ヲ行ク」とする。夢の内容は明らかではないが、二日に真容院を立つにあたって、道中の「盤纏」（旅費）以下が贈られたというのであろうか。昨日は馬十匹が用意され、行者四十人と副僧正が見送り、さらに寺を出て二里を過ぎた小堂で、副僧正が先まわりして成尋一

行を待ち受け、「茶薬」の接待をするという待遇ぶりだったというので、このような背景があっての夢だったとも考えられる。これは三日の丑の刻に見た夢だが、さらに昨日の夢では「三万菩薩」が見送りをしたのだという。先にも引いた「申文」に五台山の「一万菩薩」が言及され、現に一日に宝章閣で成尋は「一万菩薩」を目にしているものの、ここで「三万菩薩」が登場するというのは、よほどの旅の安全を祈っての菩薩の加護があったということを意味しているのであろう。

成尋等が真容院を出立したのは十二月二日、その翌日に後を追うように夢を見たという点では、これまでの将来を予示してきたあり方とは明らかに異なっている。現実には皇帝の配慮による馬十匹が帰途に用いられはしたものの、夢に見た「路ノ盤纏云々」とするような事実が記録されていないのは、書くまでもなかったというわけでもあるまい。副僧正以下から受けた厚遇のほどが、夢ではこのように具体的な旅費の支給等へと発展した考えられなくもないが、現実との違いはあまりにも見えすいている。成尋は一日に真容院において「石提子一箇ヲ趙行者温翰ニ預ケ了ンヌ。来年参仕ノ時用フベキ料ナリ。百日修行ヲ遂ゲン為ニ明年参ルベキ由人々ニ示シ了ンヌ」と記し、二日は「五頂ニ雪有リ。此度ハ拝セズ。明年巡礼ヲ遂グベシ」、三日は繁時県まで下り、そこで「酉ノ時知県来坐ス。今四月来県。明年ノ遊台ニ必ズ謁スベシトイヘリ」などと、明年には再度五台山へ巡礼する予定であることを表明する。「百日修行」とあるので、すでに具体的に日程なども話し合われていたはずで、天台山でも再び修行する予定にもなっているので、翌年の六月に日本に帰国する供僧を杭州で見送った後、今度は冬になる前にと取って帰したのであろうか。私は、この三日の「路ノ盤纏云々」とする夢は、前日にかかるのではなく、来年の再度の五台山巡礼に関して言及したのであろうと思う。二度目の五台山からの帰途に、もしなにほどかの「路ノ盤纏」等が与えられたとすると、成尋は必ずこの日の夢を取り出して、すでに前の年に霊夢を見ていたと記したに違いない。それとここにはきわめて概略的な内容しか知ることができないが、別冊の「夢記」にもっと詳細な記述があったはずである。

五台山からの成尋の帰路はきわめて順調で、それにあわせるかのように、十二月十二日には「丑ノ時、夢ニ文殊現身ノ説法処ニ入リ、宮殿ヲ見ル云々」と、五台山に垂跡したという文殊菩薩が説法する場に我が身を置き、菩薩の住する建物を称したのであろうか、宮殿をまのあたりにしたというのである。二日には「三万菩薩」が見送り、この日は文殊菩薩の姿を夢に見るという幸運さで、二十六日に無事伝法院に帰り着くことになる。ところが、翌二十七日は雪が降り初め、成尋はこのことから、

参台ノ沿路廿八日全天晴レ雨雪無ク、真容院ニ着キ了ヌン。廿九日大雪下ル。今月一日天晴。太平興国寺ニ参入シ院々ヲ巡礼ス。二日天晴。真容院ヲ出デテ華厳嶺ニ登ル間、小雪有リ。即チ天晴。廿六日ニ至ル雪無シ。今日雪下ル。明ラカニ文殊菩薩ノ加護ト知リヌ。院内ノ諸僧皆以テ感悦ス。両月雪無キニ依ツテ公家恠シミヲ致シ、伝法院ニ勅シテ雪下ルヲ祈ラセラル。即チ廿四日大雪下ルコト五寸許リ云々。而シテ途中雪下ルコト無シ。弥以テ聞キテ喜ブ。

と、往路の二十八日間、復路の二十七日間、いずれも真冬であるにもかかわらず雪に煩わされることがなかった。ところが五台山の真

容院に着いた翌日に大雪、帰途につく十二月二日も雪だったのだが、帰りの道中はまったく降らず、伝法院に落ち着いて一日明けた今日の二十七日に雪となったのである。「明ラカニ文殊菩薩ノ加護ト知リヌ」と、十二日の夢で文殊菩薩の「説法処」にまで入ったというのは、まさにその加護が示されていたのだと、首尾の相応をするのを知ることになる。

このように、『参天台五台山記』には時に夢を記した後、その結果としての幸運な体験を解き明かす体裁をとるが、これは在唐記録としての一貫性を保つためで、より詳細には「夢記」の方に記述していったはずである。そこには最大漏らさず見た夢を書き込み、後になってめぐりあわせた幸せを、どのような由来によるのか自分自身が納得するためにも点検し、該当する記事を抽出して現実と結びつけるという作業をしていったといえるであろう。彼は、夢の因果を信じた、いわば運命論者といってもよく、夢の体験はすべてではないにしても必ずこの世に実現することを前提にし、その証を得るためにも「夢記」を記録していったに違いない。彼にとって奇跡と称してもよいことがらは、いきなり出現するのではなく、まず夢による予示があるはずだとの考えによるのであろう。

十一、十二の両月は雪が降らず、朝廷では不審に思い、伝法院の僧達に降雪を祈らせたところ、かろうじて十二月二十四日に都には五寸ばかりの大雪が降ったのだという。もっとも成尋の旅では雪に遭遇することなく、帰って来た時にはすでに消え去ってしまっていたようで、話として聞くにすぎなかった。このように前年の十一月から雪を見ることなく、年の明けた正月・二月になっても雨が降らず、これでは深刻な旱魃になりかねない。皇帝のもとでは、成尋の五台山での奇瑞を聞き知ったのであろうか、三月一日に「正二月雨無シ。五穀絶スベシ。雨ヲ祈ラシム。勤仕スベシ」との宣旨が下され、早速翌二日から後苑の瑶津亭道場所において七昼夜の祈雨の法を勤めることになったのである。多くの僧達を従えての祈禱が始まり、皇帝が訪れて焼香するし、殿上人が多数つめかけ、皇后達までも加わるというありさまだけに、成尋としては「小僧始メテ此ノ事有リ。本国ノ為ニ験無キハ大恥辱ナリ。此事ニ依テ誠ヲ致シテ修行シ、三日ノ内ニ大雨ヲ感ゼント欲ス」とかなり悲壮な覚悟をするのだが、空は無情にも雨気がなかった。

二日目に、皇帝が勅使の大保を通じて「夢相有ラバ奏スベシ」との下命があり、成尋は「今朝後夜ノ時、護摩ノ間夢ノ如ク人告ゲテ云フ。四金剛日月ノ光ヲ隠ス。三日ノ内必ズ雨下ルベシ云々」と奏上している。「夢ノ如ク」とはするものの、夢でのお告げだったのであろうか、日月が隠れ、三日のうちに必ず雨が降るというのである。三日目の三月四日、空は晴れて「雨気無シ」とした後、

辰ノ時、散念誦ノ間、眠リ入ルノ処、陵王ノ如キ装束ノ人一人、納蘇利ノ如キ装束ノ人共ニ天ニ馳セ上リ了ンヌ。覚メ畢リテコレヲ思フ。赤竜青天ニ上ルナリ。深ク憑ミテコレヲ念ズ。日中ノ時モ切々ニ祈リ申シ了ンヌ。

と、好都合にも陵王と納蘇利の装束姿の二人が現れ、天に昇った夢を見たと記す。それぞれ左右の舞楽で、赤と緑色の竜面をつけるのだが、それが昇天するというのは、眠りから覚めて判断しているように、まさに雨の兆候を意味しており、夢を信じる成尋としてはますます奇跡の出現を祈らずにはおられなかった。

夢を見た辰の刻から六時間ばかり後の未の時、「俄カニ以テ天翳

リ大雨下ル。雷電頻リニ鳴ル。雨足彌大ナリ。一時ノ間大イニ甚雨降ル」とひとしきり大雨となり、申の時には空も晴れて雨気がなくなってしまったという。勅使が訪れ、これだけではまだ雨不足でさらに祈るようにとの宣旨があり、成尋は「竜王天ニ登ル。更ニ何ノ疑カアラン。聖旨ニ随ヒテイヨイヨ精禱スベシ」と、夢に見た竜に励まされるように返しをするのであった。三月五日「雨下ル。夜ヨリ辰ノ時ニ至ル大イニ下ル」、六日「雨大イニ下ル」と連日の雨で、ついに勅使は「雨已ニ満ツ。水出ゾルコト二尺五寸云々。今ニ至リテハ雨ヲ止ムベシトイヘリ。日中ノ時ヨリ止雨ヲ祈ル由」と、今度は止雨の法を求めるありさまになってしまう。

雨が降ったのは事実としても、直前に竜が昇天する夢を見たというのはあまりにも都合がよすぎる感じがし、作為があるのではないかと疑いたくもなってくるが、これまでの経緯からするとまんざら虚偽でもなかろう。壁島を離れて杭州に着くまでの多聞天、皇帝からの紫衣拝領、五台山の往復路での文殊菩薩による加護、祈雨の法での竜などと、重要なポイントはすべての夢のお告げがあり、それがいずれも実現するというのが、『参天台五台山記』に記された彼の人生だったといっても過言ではない。結果があって記録したのではなく、夢は彼にとって将来のいつの日か実現可能な予示であると信じていたからこそ「夢記」として書き留めていたのである。というよりも、五台山への巡礼にしても、神宗皇帝へ呈上した「奉文」に「少年ノ時ヨリ巡礼ノ志有リ」とするように、夢を実現する努力を怠らなかったのだともいえよう。

注

(1) 『参天台五台山記』は、島津草子著『成尋阿闍梨母集参天台五台山記の研究』(昭和三十四年刊、私家版)、平林文雄著『参天台五台山記校本並に研究』(昭和五十三年刊、風間書房)により、一部私に改めた。

(2) 『成尋阿闍梨母集』の本文は、大阪青山短期大学本(冷泉家旧蔵)を底本とした拙編『校注成尋阿闍梨母集』(一九九三年刊、和泉書院)によった。

(3) 拙稿「成尋阿闍梨の渡宋――『成尋阿闍梨母集』覚え書き――」(「詞林」第一二号、一九九二年一〇月)、同「成尋阿闍梨の天台山・五壹山への巡礼」(懐徳堂友の会編『道と巡礼』所収、一九九三年一二月刊、和泉書院)

(4) Robert Borgen "The Case of the Plagiaristic Journal: A Curious Passage from Jojin's Diary" ("New Leaves "The University of Michigan 1993) ここでは、『参天台五台山記』の抄訳とともに、その本文が円珍(智證大師)の記録からの影響の大きさについて言及する。

――本学助教授――